# 論文の内容の要旨

論文題目　　説話と記録の研究

氏　名　　池上洵一

本論文は、日本の院政期から鎌倉時代を中心とした時代における説話の生態を、公家日記・言談の記録・説話集等、既成ジャンルの枠組みを越えて追究し、説話の生成と伝承の機構、集成と記録の方法を解明して、説話集が持ちえた文学的意義を考察し、新たなる視点からする文学史の構築を試みたものである。

本論文は、第一編「公家日記の方法」、第二編「言談の記録」、第三編「説話集とその周辺」、第四編「史的展望の試み」、第五編「新資料の研究」の五編からなり、各編は上述の研究を実現させるため、基礎的諸問題の検討から文学史的課題の考察へと順次追究を深めるべく構想、配置されている。

まず、『玉葉』『台記』等の男性貴族漢文日記における説話伝承記事を分析し、日常生活の中で口頭により伝達される説話が、伝承の場を支配している諸要因、すなわち各種の文化伝統やその時々の社会情勢、年中行事や公事、細かくは各人の人間関係や立場によって、発話の契機が支配され、話題の選択や主題の解釈、話の連関や記録の方法等において強く規制されている事実を確認する。

これに対して『江談抄』『中外抄』等の文献は口伝・教命にかかわる言談の記録であり、日常的な説話伝承とは一線を画して取り扱うべき対象である。口伝・教命は貴族界の名家

の老識者が後進の者に伝授する公卿学の奥義であるが、伝授されるのは条文的に決定された規則ではなく、伝承と経験により体得された規範であり秘訣であるから、体系的であるよりも場を支配する諸要因によって規制されるところが大きい。藤原忠実の言談の記録『中外抄』と『富家語』とが話題および筆録の方法において大異するのは、保元の乱を境に急転した彼の立場の反映に他ならない。言談の記録においては、伝授者と筆録者との対話を通じて両者の人間性がきわやかに描出されている場合があり、説話集とは異質な、対話の文学としての可能性が示されているが、後代の享受者はこれらの書に知識・教養としての説話を求めるに急であったため、結局この可能性は生かされなかった。すなわち『江談抄』においては、雑纂本から類聚本に向かう過程で対話的要素が排除され、『中外抄』『富家語』は、『古事談』に採録されて、説話集の説話としての普遍性を賦与されたのと引換えに、言談としての臨場性を喪失したのである。

一方、説話集の説話は、文章表現を前提として一回的な場からは解放されている点に特徴があるが、口頭で伝達される説話をそのまま文字化すれば説話集の説話となるわけではない。説経や法談など口頭伝承の世界との関わりが深い『打聞集』、金沢文庫本『仏教説話集』、『百座法談聞書抄』等は、それぞれに新しい文章表現を模索した作品であった。説話集の盛行期は院政期から鎌倉時代にかけてであったが、それは王朝的文化伝統の変動期と重なる。巨大な伝統の変容が過去の遺産の回顧と集成を要請した。『今昔物語集』とて例外ではなかっただろう。『続古事談』のごとく伝統の断絶や価値あるものの喪失を痛惜する作品は価値観の共有なしには同感を得られないが、撰者と読者はまさしく情念を共有することが出来たのである。情念の共有は仏教説話においても著しく、『発心集』以下の仏教説話集に共通するのは、他者に対する一方的な教化や解説、啓蒙の姿勢ではなく、撰者と読者とが同行の者として信仰の情念を共有しようとする姿勢であった。人間を見る真摯な目はこの時期の仏教説話集が獲得した最も大きなものだったが、人間を見る目の深さと確かさは『宇治拾遺物語』等の世俗説話集にも通底している。

王朝的なるものの喪失が既成の事実となり、伝統的なるものを知識や教養として受け止めざるをえなくなると、上述の性格の説話集は終焉を迎えた。王朝説話は軍記や謡曲等に活発に利用されたが、説話集の形で享受しようとすれば、かえって観念的な知識・教養の具としてしか機能しない状況が生まれたのである。『三国伝記』は近江の在地伝承と密接な関係を持つことによって独特の世界を切り開いた希有な説話集というべきである。

以下、章を追って本論文の要旨を述べる。

第一編第一章「読書と談話」は、『玉葉』における談話・説話・読書関係記事を分析し、情報としての説話の役割、読書の意味を考えつつ、動乱の時代を生きた九条兼実の前半生を展望する。　第二章「口承説話における場と話題の関係」は、同じく『玉葉』における談話・説話記録を分析。社会情勢・人間関係の中で話題が如何に選ばれ、話を呼び出した場の状況によって語り口が如何に規制されているかを実証する。　第三章「説話の生成」は、『台記』を素材として作製された『続古事談』の説話を分析し、日記と説話の方法的特徴を探る。　第四章「公家日記における説話の方法」は、『明月記』の談話記事を分析。定家本人や藤原長兼の談話を多角度から検討して、「興定め」なる伝承の場に注目しつつ、日記の談話記録が独特の方法を持った存在であることを明らかにする。

第二編第一章「『中外抄』『富家語』の展望」は、談話者藤原忠実と筆録者中原師元・高階仲行をとりまく社会情勢とその変化、各人の立場や資質等の相関関係の中に、両書の基本的性格を明らかにする。　第二章「『中外抄』『富家語』における話題の連関」は、同じく両書において、話題が如何に選択され、かつ各条が如何なる連関の下に記録されているかを分析。これらの書の話題が場の状況の支配下にあることを明らかにする。第三章「『富家語』有職故実的諸条の背景」は、同書に説く大嘗会の河薬について探究。烏賊の甲の故実が、忠実にとっては鬱積した思いの痛切な表明であったこと等を明らかにして、新しい読みの可能性を探った論である。　第四章「『江談抄』における「場」の問題」は、『台記』に現存説話集にはない説話が記録されていること、『江談抄』にその後日譚があることを指摘して、同書前田本第八七条の長大な談話の場を詳細に解明する。　第五章「『江談抄』の小宇宙」は、『江談抄』を説話資料的ないし説話集的に読むことへの疑念を提示し、匡房と実兼との対話の文学としての特徴を論じる。

第三編第一章「『打聞集』断片的記事の性格」は、同書の表紙裏や巻末に見られる雑多なメモ的記事の正体を解明し、併せてその文体的特徴を論じる。　第二章「金沢文庫本『仏教説話集』の説話」は、同書の説話の出典を考証。中国敦煌莫高窟出土の『歓喜国王縁』と共通する話があることを指摘し、比較文化論的考察を試みる。　第三章「『水鏡』と説話」は、 元暦二年京都大地震の記録として、中山忠親の『山槐記』が情報の精度において傑出することを指摘。同人の手になる『水鏡』の歴史叙述が『大鏡』とは異質なものとなった必然性を説く。　第四章「『宇治拾遺物語』の「序」」は、『宇治拾遺物語』の序文の読解を通して、同書が立つ文学的基盤について論じる。　第五章「『三国伝記』の成立基盤」は、『三国伝記』の内部徴証を精査し、撰者玄棟は近江国神崎郡に縁が深く、天

台記家の大家京都元応寺の運海と関係があったことを立証する。　第六章「『三国伝記』版本の浄土教的特徴」は、同書の近世版本の本文が浄土教鼓吹の立場から改変されている事実を指摘し、取り扱いに注意を喚起した論。　第七章「『発心集』と『三国伝記』」は、『三国伝記』との比較を通して、『発心集』に対する『古事談』先行説を批判。これと関連して『百座法談聞書抄』の文章を聞書きと即断することの非を論じる。

第四編第一章「「説話文学」を考える」は、「説話文学」なる術語の概念規定のあいまいさとその理由を論じ、併せて口承文芸と文字文芸との方法的差異について考察。　第二章「古代の説話と説話集」は、平安時代の説話と説話集について展望し、殊に往生伝の系譜、散佚『宇治大納言物語』の意義とその位置づけを明確にした。　第三章「説話の生成と伝承」は、神話・伝説と対立する概念としての世間話の生成・伝承過程を見据えて、一般的理論の確立をめざす。　第四章「中世の説話と説話集」は、鎌倉時代における説話集の盛行と、室町時代におけるその衰退の必然性を探究したもの。　第五章「説話集の序文」は、説話集における序文の有無を、公性と私性の両面から論じ、公性からの訣別が物語的説話集にとって必然であった所以を説く。　第六章「説話集の時代」は、説話集における撰者の寡黙さと能弁の意味、説話に対する共時的緊張関係の検証を通して、その文学史的意義を考察する。　第七章「「鬼」の悲しみ」は、鬼の形象に託した伝承者の思いを近代の合理主義が無感覚に切り捨てた結果、失ったものがいかに大きかったかを論じる。

第五編第一章「永青文庫蔵『豊後国風土記』について」は、旧熊本藩主細川家所蔵の文禄三年写本についての研究。　第二章「島原松平文庫蔵『古事談抜書』の研究」は、同書と『十訓抄』との特異な関係、『彫玉集』の逸文らしい中国説話の存在を論じ、奥書に見える人物がすべて鎌倉鶴岡八幡宮の社僧であることを明らかにして、関東における説話受容の一端を解明する。　第三章「東大寺図書館蔵『三宝聚集抄』について」は、同書の概要を紹介。中世釈迦信仰や春日信仰にも関係する貴重な文献たる所以を述べる。　第四章「東大寺図書館蔵『釈迦如来釈』」は、同書の全文を翻刻して各条の典拠を考証。中世釈迦信仰の初期の様相を示して貴重である所以を述べる。